



因幡の素兔

「因幡国に、八上比売という美しい姫がいる。」といううわさを聞いて、大国主命の兄さん神たちは、お嫁にもらおうと思い、先きをあらそつて会いに行きました。弟の大国主命は、兄さん神たちの荷物をいれた大きな袋を背負わされ、あとからついて行きました。

大国主命が因幡国の気多の岬をとおしかかると、赤はだかの兎が泣き伏しているのに出会いました。兎は、鯨をだまして淤岐島からこちらへ渡ろうとしたけれど、嘘を知って怒った鯨に皮をはぎとられてしまったのです。兎は前に通りかかった兄さん神たちから、「海の水につかり、風にあたっていないさい。」といわれ、そうしたら、もっと痛くなつてしまい、泣いていたのでした。

大国主命は兎に、「川の水で体を洗い、がまの穂をつみ、敷きちらして、その上に寝ころぶとよい。」と教えました。

教えられたとおりにして、もとの体にもどった兎は、「心のやさしい大国主命こそ、八上比売と結婚するだろう。」といいました。